

Title	わが和田木松太郎先生を偲ぶ(和田木松太郎教授追悼号)
Sub Title	In Memory of the Late Professor M. Wadagi(Memorial Issue of the Late Professor Matsutaro Wadagi)
Author	藤森, 三男(Fujimori, Mitsuo)
Publisher	
Publication year	1987
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.30, No.5 (1987. 12) ,p.222- 223
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19871225-04054268">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19871225-04054268</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## わが和田木松太郎先生を偲ぶ

藤 森 三 男

人格者である。和田木先生のゼミナールに入会を許されて以来、三十年来のお付き合いであるが、一度として大声で叱られたことはないし、イバリ語をきいたこともない。慶應義塾の出身者は確かにイバリ語を使わない人が多いが、この人は桁違いであった。助手を勤める私を、外で紹介して下さる時、いつも「同僚の藤森さんをご紹介致します」といわれた。先生が穏やかだと逆にこちらが図に乗るのは愚物である証拠だが、ひどいことをしばしば言った。志木高校の校長さんを勤められている時、「ぜひ早くやめるべきである。何故なら大学についてなら抱負もあろうが高校段階の教育について、今まで何か考えたことがあったのですか」と途でもないことを進言したことがある。「いや色々な事情があってね」と一言おっしゃって笑っていらした顔を忘れることができない。無礼な者も許してしまうのが、この方の特長である。

私が名づけた「和田木テスト」という人柄の検査方法がある。地下鉄を渋谷から乗って赤坂見附で乗り替えるとき、散々待たされ、しかも時間調整で戸は開いたまま動かずにいることがある。そこへ渋谷から次の電車が反対側に入ってきて、乗客はこちら側に乗り移ろうとする。柄の悪い私などは不公平だとふくれ面をして、もしも彼らが乗り移る前に戸が閉まれば心中ニコニコする。これに反し和田木先生は、「もう少しの間、戸を開けておいてやれば、皆さん乗り移れたのに」と逆の反応をするのには驚く。以来、かかる事態のとき、どんな反応をするかによって和田木型の人物であるか否かを測定する尺度とすることにした。電車に乗るべく階段を駆け下った人が直前にドアが閉まって乗れなかったのを電車の中から見、同情をする人は和田木型であり、心中ニヤニヤするのは非和田木型である。テストをしてみると大方の人は私と同様に非和田木型である。先生のような人柄のよい人は非常に少ないというべきである。

こんな話もある。インドネシアから戦後、帰還された和田木先生は、千代田生命に復帰したが、その傍ら、塾の大学院に通われて、恩師三辺金蔵先生や兄貴分に当たる小高泰雄先生の教えを受けられていたところ、三辺先生は戦時中に立教大学の総長であったためマッカーサーパーシ（公職追放）に遭い、教授職として留まることができなくなった。そのため三辺会計事務所を開いて職業と

したのだが事務所でペイトン・リトルトンの学術書を読んでいるのだから儲かる筈がない。千代田上命をやめて事務所員となった和田木先生は生家の松勘商店などの税務事務による収入を充当してこの窮状を救ったという。時を経ずして三辺先生は、若い頃の教会の友人である英国人牧師らの占領軍司令長官に対する嘆願もあってパージが解け、慶應大学へ復帰されることになったから、三辺会計事務所は無意味のものとなって閉鎖された。和田木先生も三辺先生と共に三田の経済学部講師として勤務することになるのだが、この辺の出处進退は真は和田木先生らしい。

「自分で運を切り拓くという人生の生き方もあるが、運はあなたにまかせて、自分を求めてくれる所へ行って仕事をするのも、一つの生き方である。」

商学部長を勤められたのもそうであったし、松阪大学が新設されたとき、島崎隆夫先生に請われて、もう一度大学の専任として勤められるつもりになったのも、この生き方の結果である。体は好調とはいえなかった。もともと大学時代ラグビーをやり、インドネシアで従軍したのだから、ご丈夫だった筈だが、私と付き合っていた三十年間には吐血なされたこともあり、心臓病用の救急薬を持参していたこともあって、ご丈夫とはいえなかったが、若い頃、丈夫だった記憶をもつ人は、えてして頑張り過ぎるものである。定年前に塾商学部をおやめになる原因となった心臓病のため、松阪でお亡くなりになってしまった。大変暑い日であったという。やはり少し無理だったのであろうか。しかし仕事を愛していた先生は、十分に幸せだったと思う。この新任地で図書館の整備ぶりや、就職部長の仕事内容を愉快そうに私に語っていた。場所も時も弁えず、仕事の話ばかりして、あの愛らしき奥様にたしなめられたこともある。

和田木先生の著書『現代企業会計』『最新簿記提要』『財務管理論』は広く知られているが、『日・インドネシア・英対訳会計用語辞典』は、日本人の知らないインドネシアにおける名著である。インドネシアに対する「賠償留学生」のために書かれた本書は、今でもコピーとなってインドネシアで広く読まれているという。本業でない分野で留学生に対する好意からだけで本を執筆することはいかに難しいか、必要がありながら「経営学を勉学する人の為の日本語教科書」を執筆できずにいる私などは汗顔のいたりである。今は思い出の人となった、わが和田木松太郎先生に合掌。

(本稿は三田評論 (1986年2月号)「故人回想」を許可を得た上で転載したものである。)